

私、今は農外所得の方が断然多いですが、それが何か？



私、今は農外所得の方が断然多いですが、それが何か？

この男、ものすごい数の資格と肩書を持つ。農業大学校非常勤講師、日本GAP協会理事、宅地建物取引主任者、有機JAS食品検査員、ISO9001主任審査員など……。生計を立てているのはこちらの関係の仕事がほとんどだ。では農業経営をしていないのか？ 否である。国産サンショウの一大産地に山林地主の孫として生まれた彼が立ち上げた新規事業構想とは何か。

取材・文・撮影／紺野浩一（編集部） 写真提供／服部一成

「よそ者、バカ者、若者が農村を変えろ」という言葉、これまでの本欄でも何度も使われてきたのではないかと容易に想像できる。でも、この3つの条件をすべて兼ね備えた、農業青年なる人々は、本場に少ない。

この数年間、筆者は『アグリズム』の編集に携わり、全国各地の農業青年を取材してきた。彼ら彼女たちを思い起こせば、年齢的には若くても将来を見据えしっかりと人生を考えているし、生真面目という印象を与えてくれる人ばかりだった。その存在に、感動を覚えさせられた。

しかし一方では、「もっとキラキラしないと、人生つまんなくね?」「農業を変えろと言いながら、自分自身も含めて本当に変化しようとしているの?」と、問い詰めたくなったりすることもある。筆者が前職において芸能界や風俗業界特有の成り上がり「エナジー丸出しの人々」がきわめて身近にいたから、ピュアすぎる人柄に触れると余計にそう感じるのだろうか、やっぱり多くの農

業青年にはおバカ度が足りない。夢や理想、もっとうと成り上がるうという欲と一体になった、おバカ度だ。

だが、この服部一成、筆者からすれば、先述の3条件を持つ希有な若者、農業青年なのである。もつとも不惑という年齢ゆえに、「おいおい若いのか?」というツツコミが入るかもしれない。が、農業界では、たしか50歳ぐらいまで若造呼ばわりされてはいたはずだ。その慣習に免じてご許容いただきたい。

学習塾をやめ農業経営へ 勉強漬けの毎日を送る

服部は、和歌山県内で最大の個人山林地主だった服部善次郎の孫にあり、現在は50haの山林を管理している。祖父が戦後から昭和40年代半ばまで買い集めた山林の大半が有田市清水地区にあり、そこから真言宗総本山である高野山まで連なる山々を服部家は所有していた。一方で祖父は手広く商売を広げ、映画館経営

や蚊取り線香の原料となる除虫菊の売買で財をなした。服部の父も山林を管理するかたわら、学習塾を経営していた。

高校卒業後、成城大学経済学部に進学した彼は、体育会系のアーチェリー部に所属、関東大会で入賞するなど活躍するとともに、四大学体育部学生連盟の委員長として多くの学生をまとめる立場にあった。

「アーチェリー部も体育部学生連盟も歴史が古く、年齢の離れた先輩との交流が結構あったんです。あそこで人付き合いを学びましたね」

就職先に選んだのは、中堅ゼネコンだった。様々な部署を経験したが、それぞれの部署で専門的な知識と交渉技術を身につけ、現在でもその時の経験が活動の礎となっている。

地元・有田市に戻ったのは27歳の時だ。父が経営していた学習塾に次期後継者兼講師として入ることになった。塾は少子化の影響を受けて生徒数が減少を続けていた。このままでは先が見えていないと思い、当面預かっている生徒が進学次第、塾の経営をやめることを決意した。

「5年先を見据えて何で食っていくか」と考えた時に、ふと『あつ、農業だな』と思ひまして。農地は農家さんに貸していましたが、更新期間を機に自分でやってみることにしま



服部果樹園 代表

服部一成

和歌山県有田市

はっとり・かずなり ●1970年和歌山県有田市生まれ。94年成城大学経済学部経済学科卒業後、株式会社ナカノコーポレーション（現・株式会社ナカノフード建設）入社。4年間勤務後、実家に戻り家業の学習塾を手伝う。2000年農業経営を開始。04年有田地方環境保全型農業研究会を発足。08年日本GAP協会理事に就任（現職）、09年からはJGAP2010青果物版作成のため青果物部会技術委員も務める。ほかISO9001主任審査員、日本農林規格（JAS）有機農産物・有機加工食品の検査員等、生産・品質管理にかかわる資格を持つ。経営規模はウメ10a、サンショウ40a（ただし改植中および改植予定分含む）、ほかレモン等。

した」

今のように、農業が20代の若者が選ぶ職業ではなかったはずだ。にもかかわらず、服部は農業界に飛び込んだ。ただ、思い切りよく飛び込みながらも、泳ぎ方を知らない自分自身を知っていた。まずは栽培技術を身に付ける必要があると考えた。しかも周辺の農家に学ぶのではなく、トップクラスの技術を身に付けなければ意味がないと思った。そこで、和歌山県立南部高校園芸科の教壇に立つ谷口充（著書に農文協『ウメの作業便利帳』がある）に教えを請うことにした。服部にとっては高校生と一緒に実習授業に参加することを許されてから現在まで、谷口は技術の師であり、農業技術への探究心を掻き立てる心の基となっている。「文系の人間ですからね、肥料の三要素さえ何たるかを知らなかった。朝から高校で授業を受け、昼から夕方まで畑で専門書を持ち込んでの技術習得作業、夕方からは塾で生徒たちを教え、夜は小学生から大学生までの農業関連書を読み漁った生活を1年ぐらい続けましたね」

生産は周辺の農家に任せ 自らは別の仕事で生計を

本格的に生産を始めたのは2000年からだ。品目はウメ（南高梅）。

ミカン生産が9割以上を占める地で、ウメを生産する姿を、周囲は「おかしなヤツやなあ」と見ていた。「でもね」と服部は言う。「みんなが作っているもん作ってたって、しゃあないやないですか。それにミカン作ってたって何だかんだ言われるわけやし」と。この言葉だけを見ると、ただの恐れ知らずの若輩者という印象を与えるかもしれない。だが、服部と付き合う農家をして「有言実行やな」と言わしめるだけあって、確実に結果を出していった。

そのひとつが、流通大手であるイオン株式会社との取引開始だ。服部は当時イオン独自で設計していた農産物品質管理基準「イオンA-Q」をクリアすることができ、服部果樹園の南高梅は、同社のプライベートブランド「トップバリュ」の商品としてラインアップに加わることができたのだ。その取引は今なお続き、季節限定の商品であればこそその話であるが、西日本のイオンでは「棚が確保できている」と話す。

「取引が始まるにあたって、店頭に立っただけです。イオンモール姫路リバーシティーでしたっけね。1日で500kg、売り切りました。もう神様扱いですよ（笑）。ただ、イオンさんと本格的に取引するとなると、ウチだけでは出せる量ではない。そ



1 2 服部の管理する山林。山々を超えると高野山がある。ふもとには階段状扇型に広がる棚田がある。「あらぎ島」と呼ばれ、棚田百選にも選ばれた。
3 4 5 服部の決断で経営をやめて塾舎は作業機置場として、サンショウの選別場として有効活用されている。またプランターで豆や果樹を育てたことも。「廃校を利用して植物工場なんてニュースがありますけど、それやったら多分ウチが最初です」と服部は笑う。



私、今は農外所得の方が断然多いですが、それが何か？

6 7 南高梅からサンショウに改植を進めている畑にて。生サンショウをイオンや水産加工会社に出荷、不足分や粉サンショウは地元JAから仕入れている。「軽くて小さくて高く売れる。物量コストはかからないから宝石、砂金と同じ」と服部は独特の表現で魅力を語ってくれた。8 イオンに出荷している南高梅の畑の周辺はドリフト対策としてネットで囲われ、料亭用に無農薬でレモンも栽培している。9 道具のメンテナンスにこだわる服部は作業後必ずハサミを研ぐ。その姿勢を周辺の年輩の農家が評価してくれたとか。10 剪定技術は独学だけでなく、様々な技術者に教えを請うて身に付けた。



れで地域で一緒に取り組めないかと考えるようになりました」

時期をほぼ同じくして服部は仲間作りに奔走する。有田地方環境保全型農業研究会を作って技術を共有するサークルを設立。同時に、イオンの栽培・品質基準を守ることができると周辺の生産者を、名前こそないが「服部果樹園グループ」として緩やかな組織を構築した。現在、前者の組織には40名、後者には5名の生産者がいる。

「服部果樹園グループ」と言いますけど、あくまで取引先から見た関係ではないんですわ。つまりは、いろんなことで外に出て行くことが多い私と、地元で生産を頑張っている仲間の、いつてみれば農家どうしの業務提携にすぎないんです」

生産者に向けて技術指導を行なう服部だが、一切料金を取っていない。彼が新たな売り先を見つけてきても上前をはねることさえしない。

「技術指導料を頂戴しないのは、私の話に農家のみなさんが耳を傾けてもらうためです。JAの営農指導員や県の改良普及員が無料で教えてくれるわけですから、金がかかるとなると見向きもしません。彼らは教科書通りの技術を伝えているだけだけど、私はそれぞれの土壌条件や日照条件に合わせた指導ができますか

ら、海外の農業コンサルタントのように報酬をもらうのが当然と思っています。でも、話を聞いてもらえないことには先へ進めませんから」

それでも「服部さんのやり方についてはいいけんわ」とやめていった生産者も多くいた。できない人がいて当たり前、というスタンスの服部はサラリと受けて流した。

「販売先確保にしても、私が農家から金をもらったとすれば、みんなそれを回収しようと躍起になる、エゴが出てきてしまう。私自身、第二農協になる気持ちなんてさらさらないですし、『そんな端金なんか、いるかい！』ってわけです（笑）」

そんな彼に現在の売上を聞いた。50aあった梅畑は10aに縮小中ということもあり、現在の農業収入は約100万円とか。では、一体何で生計を立てているのか？ その答えのヒントは名刺の裏にあった。そこには様々な肩書と資格が明記されていた。和歌山県認定エコファーマー、毒物劇物取扱者、和歌山県農業大学校非常勤講師、日本GAP協会理事、JGAP審査員補。さらには、宅地建物取引主任者、有機JAS食品検査員、ISO9001主任審査員、ISO22000審査員補……。いわば「農業界の資格王」といった感のある服部は、改良普及員資格も

持っている。その取得理由は、実際にかなっている。

「資格も何もない私が教える技術なんてものはなから信用してもらえなかったんですね、農家さんには。『ほんなら資格、取ったるわ』と思っ

て。効果？ テキメン（笑）」

それらに加え、これまでの人脈と経験を生かして農業技術コンサルタントや食品商品開発アドバイザーなど、様々な食い扶持がある。

「私は農外所得で稼いでいるんです、今のところは。そんな私は『農業をやっていないやないか』とよく言われるんですわ。でも、何か問題でもありませんか？ 農業会計上は農外所得が農業所得を上回っても何ら問題でもないやないですか。それに、農作業と農業はまったく別もんですよ。私がやりたいのは農業経営、事業経営なんです。考えることは農業じゃない、なんて思い込みがおいしいのであって。一般の企業は中・長期の事業計画に基づいて行動していますけども、私もちゃんと布石を打っています」

服部が言う布石とは、サンショウウ（山椒）を軸とした事業であった。

生まれ育った地域を世界

トッピングの産地にするために

服部が生まれ育った和歌山県は国

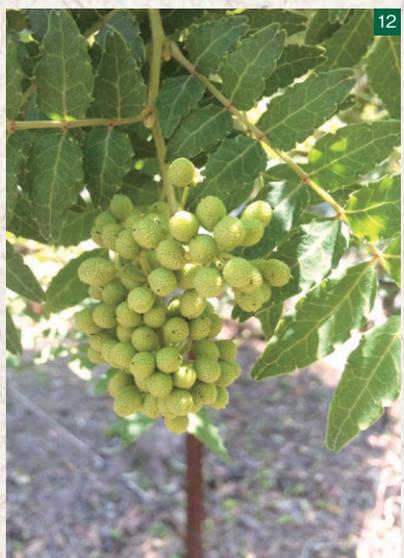
産サンショウウの8割を産出する一大産地だ。なかでも彼が管理する山林がある有田市清水地区が中心だ。この地で採れるのはブドウサンショウウという系統のもので、実が房なりになるのが特徴。香り高く、辛みも中国・韓国産のものよりも際だってい

る。また歴史を遡ると、霊山で修行する修験者や僧侶が作った腹痛緩和薬「陀羅尼助」の原料になった説があるほどから、相当古い。戦後以降は、農家があぜや庭先、山中などに植えてきた。

サンショウウによる事業立ち上げ構想が浮かんしたのは、2005年。イオンとの取引も順調に進み始めた時期だ。

「清水のサンショウウの生産者も今では平均年齢75歳です。限界集落化が進めば、ウチの山も管理しきれなくなる。『それならば自分がやるしかない』と思ったんです。こんなに面白い作物はないですよ。特に薬効、機能性はまだまだ未解明です。だからこそ本当に面白い」

5月中旬から下旬の1週間にかけて収穫されるサンショウウは実サンショウと呼ばれ、佃煮などの材料となる。一方、7月中旬から収穫される干ザンショウ（熟成が進んだサンショウをこう呼ぶ）は乾燥機にかけられ、粉になり、その多くは香辛料



11ブドウサンショウの木。実生だと生育が安定せず、フユザンショウを台木とする接ぎ木栽培が一般的になっている。経済的樹齢は20年。12果実。サンショウはミカン科の低木落葉果樹。効能は未解明な部分が多いが、ブドウサンショウ抽出物からSARSウイルスを抗活性化させる成分が入っていることが分かったという。13生ザンショウであればこのように簡単に指で収穫できる。14挿し穂の実験。15発芽実験。服部はサンショウ研究・技術開発にのめり込んでおり、国内で唯一のサンショウ農業博士で友人の前田隆昭らとともに取り組んでいる。

私、今は農外所得の方が断然多いですが、それが何か？



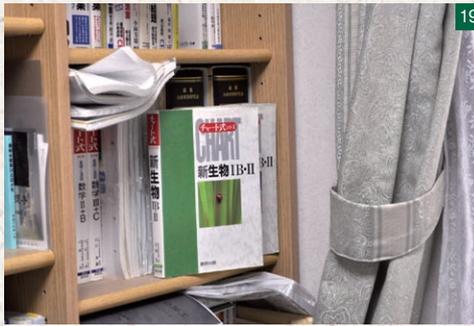
17



16



20



19



18

16JAありだ清水営農センターにて。碓佳永営農センター長、北林利樹副審査役と。現在の取引先でもあり、今後一緒にサンショウ事業を進める上での重要なパートナーになると考えている。17服部果樹園グループの仲間。(上左より)長谷光浩、服部、若林満明、(下右より)間佐古将行、若林康信。18JAありだが開発した加工品。服部が仕入れて県外の外食店にサンプルとして渡し、サンショウの普及に努めている。19作物生理を知る上で役だった大学受験用の参考書。20資格取得時の勉強は「アーチェリーをやっていた時の集中力が生きた」という。

になる。また漢方薬の原料にも使われており、地元のJAありだは国内漢方薬メーカーのトップ、ツムラと取引をしている。

生産者を組織化した地元単協がサンショウ出荷の中心だとすれば、服部が出る幕はないように思われるが、そんなことはない。それはツムラの動きとも関連してくる。というのも、同社は漢方薬の国際化を戦略に掲げており、すでに主力漢方薬「大建中湯」の米国での臨床実験をスタート、2017年には承認され販売される見込みだという。(参考文献『FACTA』2010年11月号)。

ツムラに限らない話だが、これまで漢方薬原料のほとんどは中国からの輸入に頼ってきた。今後最悪の場合にはレアアース同様に日本国内に入ってこない可能性も考えられ、当然、漢方薬メーカーは国内産地からの調達量を増やしていかなければならない。事実、ツムラは和歌山以外にも高知県越知町に契約農場を構えている。

「米国進出を考えた場合に、JGAPはもちろん、グローバルGAP、さらに米食品医薬品局(FDA)の基準をクリアするぐらい生産工程が明確なものでなければ漢方薬原料には使ってもらえませんよね。そこで

私の出番なんです。JGAPやISOの知識を生かすことができます。そうすることで、和歌山の有田は、世界でトップのサンショウ産地になれるんです」

服部がこの10年間取得してきた様々な資格は単に食い扶持を維持するためのものではなかった。すべては彼の夢の実現と、地域の将来像を築くことに繋がるものだったのだ。

清水地区だけで50haというサンショウの圃場は点在化しており、集約して経営するのは非現実的だ。そのため、服部自身はこれまでの活動同様、「地域の零細農家を引っ張り上げたい」と考えている。当然JAありだと一緒に取り組んでいくべきと考えており、その関係も良好だ。「サンショウ農家さん向けに生産工程管理のシステムを作っていくのがこれからの仕事。簡素化され、しかもこの地域の風土を反映したシステムを、ね」

山林地主の子孫ゆえに地域の未来を見据え、果たさなければいけない役割に気付いた服部。「やせ我慢、大変ツツわ」と多少自嘲的に言いながらも、「少子高齢化」「限界集落」といった、現代の農村をイメージする時つい思いがちな負の要素を笑い飛ばしているかのようにも感じられたのだ。(本文中敬称略)